



収量確保と品質向上のためには？

梅雨明け後、雨の少ない猛暑が続きましたが、長期予報によると9月の降水量は、平年並から多いと予想されています。気を抜くことなく、適切な管理で多収を目指しましょう。

紫斑病・カメムシ対策は2回の適期防除が基本！

紫斑病は品質の低下、カメムシは品質と収量の低下をもたらす重要な病害虫です。特に紫斑病は、雨の多い年に発生が多くなるため、今後の天候次第で注意が必要です。

- ①防除は散布時期が大事です。発生状況を確認して、適期に2回実施しましょう。
- ②薬剤がまんべんなく莢にかかるよう、散布は丁寧に行いましょう。

カメムシ吸汁による板莢



紫斑病被害粒



・防除時期

- 1回目：開花期の2週間後(9月2～3半旬頃)
多数の莢が5～15mmくらいになった頃
- 2回目：1回目防除の10日後

・使用薬剤(例)

紫斑病剤	10a当たり散布量	カメムシ類剤	10a当たり散布量
マネージDF	3,000倍 100～300L	キラップフロアブル	2,000倍 100～300L
ペルクート水和剤	1,000倍 150～300L	スタークル液剤10	1,000倍 100～300L
アミスター20フロアブル	2,000倍～3,000倍 100～300L	スミチオン乳剤	1,000倍 100～300L

ハスモンヨトウの発生に引き続き注意しましょう！

高温少雨に多発する害虫で、放置すると大豆の葉だけでなく莢・子実とも食害します。白変葉が目立つ場合は、早急に防除してください。

・使用薬剤(例)

ハスモンヨトウ剤	10a当たり散布量
プレバソフロアブル5	4,000倍 100～300L
ノーモルト乳剤	2,000倍 100～300L
トルネードフロアブル	2,000倍 100～300L

※ハスモンヨトウ剤は、紫斑病・カメムシ防除剤に混用することも可能です。



※カメムシ類剤は、ハスモンヨトウへの効果は期待できません。

早めの雑草抜き取りで品質低下(汚損粒)を回避！

大豆収穫における汚損粒発生は大きな問題で、品質低下の一大要因です。

汚損粒は、「土のかみ込み」や「雑草の汁」、「青立ち株の汁」で発生します。

特に雑草は、いつでも抜き取りが可能です。早めの抜き取りで汚損粒を防ぎましょう。また、種子をつける前に雑草を防除することは、翌年の雑草の発生を減らすことにもつながります。